

猿頬

〔延喜式二十四〕凡諸國輸調○中貽貝○中冊六斤、貽貝鮨三斗○中

凡中男一人輸作物○中貽貝鮨四斤十兩、

參河國○註略○中貽貝鮨三斛六斗○有貽貝鮨調、若狹伊豫亦

〔土左日記〕十三日○正月、中略、年船にのりはじめし日より、ぬにはくれなゐこくよききぬきす、それはうみのかみにおちてといひて、なにのあしかげにことつけて、ほやのつまのいすしすしあはびをぞ、こゝろにもあらぬはぎにあけてみせける。

〔土佐日記考證上〕ほやのつまのいすしは、眞淵の説のごとく、式に貽貝保夜交鮨とある、これなるべし、つまは妻の義にあらず、交をいふなるべし、すべて物に物をかて交へるをつまにするといへるがごどし、いすしは貽貝鮨にて保夜をつまにしたる貽貝鮨なるべし。○下

〔朝倉亭御成記〕三獻御湯漬參○中い、貝、

〔物類稱呼二〕物動○朗光○中 動物朗光さるぼ。勢州にてつめきり貝と云、筑紫にて馬の爪貝といふ、土佐にてたぶ。か。い。又。ち。が。い。共云、

〔本朝食鑑十〕蝶○中

一種有小蝶圓二三寸者、江都流俗呼稱猿頬以色赤而名之乎、味不及大蝶、但民間之食耳。

〔大和本草十〕四○朗光○中 動物朗光○中 今按、サルホニアカヒニ似テ味ヲトレリ、江戸ニ多シ、又筑紫ニ馬ノ爪ト云貝アリ、朗光ノ類ナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙三十一〕魁蛤○中

一種サルボハ、一名ハイガヒ。備前ラフガヒ、同上チガヒ、同上ツメキリガヒ、勢州ムマノツメ筑紫形アカヒニ似テ、大サ一寸許、瓦隴最粗シ、肉ノ味劣ル、

〔古事記上〕猿田毘古神坐阿邪訶、音地名、以時爲漁而於比良夫貝、自比至其手見咲合而沈溺海鹽、下